



Rainbow Net

れいんぼーTopics

出前授業 『障がいへの理解と啓発』



表紙の写真は出前授業の様子です。2017年からはじまったこの取り組みですが5年目を迎えることができました。宮古圏域小学校、中学校と協力し総合学習の時間に「障がいへの理解と啓発」について授業を担当させていただいています。キーワードは「ノーマライゼーション」です。この考えを提唱したデンマークのバンクミケルセンは「ノーマライゼーションを難しく考える必要はない、自分が障害者になったときにどうしてほしいかと考えればすぐに答えは出てくる」と述べています。やさしい表現のなかにも、ノーマライゼーションとは何かを見事に言いきっています。近年、共生社会の実現が叫ばれています。子どもたちにノーマライゼーションを伝えながら、実は、私たちのほうこそ、もう一度、向き合うべき言葉なのかもしれません。機関紙31号を無事発行することができました。本年もよろしくお願い致します（担当：高屋敷）

目次 CONTENTS

● れいんぼーTopics	1	● Report! 「福祉の現場から」	10
● 年頭にあたって	2	● こんにちは、「地域活動支援センターみやこ」です!	11
● Close-up! 自立支援協議会	3~5	● なんでもKEIJIBAN、	
● 特集 あの人にインタビュー 斎藤環先生	6~9	編集後記	12

令和三年、希望を込めて

特定非営利活動法人宮古圏域障がい者福祉推進ネット 会長 刈屋 裕之



「密」という本来はとても大切な漢字一文字が、残念な意味を含めて一年が締め括られた令和二年が閉じ、新たな年が始まりました。

始めに昨年一年間、関係機関・各位・地域の多くの皆様には、私たち「宮古圏域障がい者福祉推進ネット」の日々の目的・活動・種々の事業に對しまして、深いご理解と心温まるご支援を頂いて参りましたことに、職員一同心より感謝申し上げます。

また、異常な危機感の中、

障がい者福祉のお仕事に従事されている多くの方がたに、心からの御礼をお伝えしたいと思っています。

さらに昨年は、例年通りに計画されていた事業、イベント、会議が実施できずに、多くのサービス利用者の方達にご不便な思いをお掛けしてしまったこととお詫び申し上げます。

何処で収まってくれるのかわれない、目に見えないものたちや、各地で頻発する様々な自然災害をどうやって乗り越え、生活していけばいいものか皆目思いもありませんが、間違いなく朝がやって来て、一日いちにちを過ごしていかなければなりません。自分の足元を確かめ、わが身を

こそ守ることが、ひいては隣にいる大切な人を守ることにのだと、大事に一步ずつ歩んでいく一年としたいと思っています。

今から四十年前に急な出来事で世を去った「元・ビートルズ」のジョン・レノンさんがその晩年の歌、「イマジン」のなかで

「ただ、僕はひとりじゃない みんながいっしょになって 世界が一つになることを願っている」

とうたいました。

嘆くだけではなく、うろたえるだけではなく、信じて一歩ずつ、毎日を歩いていきたいと思います。

みんなで、一緒になって。私も願います。どうぞこの一年が、皆様一人ひとりととりまして息災な日々でありますように。



クローズアップ
CLOSE-UP!

自立支援協議会

今年の活動の成果について

実務担当者会議

石垣達也氏
(富古市保健福祉部福祉課)

今年度の実務担当者会議は、新型コロナウイルス感染症により、例年と比べて縮小しての開催とな



実務担当者会議

りましたが、第6期障がい者福祉計画・第2期障がい児福祉計画の策定の年にあたるため、これまで取り組みの確認や取り組むべき課題について協議を進めてまいりました。今年度は新たに保健・医療・福祉関係者による協議の場を設置し、精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステム構築のための取り組みを進めてきたところです。

一方、障害児障害者一体施設の整備計画に基づく地域生活支援拠点の在り方や医療的ケア児の支援、成年後見人制度を推進するための成年後見センターの設置など、今後取り組みむべき課題も累積しています。障がいを持つ方を取り巻く状況は複雑化してきており、「親」き後を見据えた支援体制を圏域全体で連携し構築する必要があります。障がいのあると感じています。障がいの有無に関係なく、全ての住民が暮らしやすい社会の実現のため、関係機関があるべき将来の姿を共有し、ともに作り上げていけるよう取り組みんでまいります。

権利擁護部会

松本良啓氏
(松本法律事務所)



権利擁護部会

当部会では、今年度も権利擁護セミナーの開催と事例検討を伴う部会の開催を予定していましたが、コロナ対策のため部会の開催を一部見送るなどの対応を余儀なくされました。

権利擁護セミナーについては、昨年までの内容をDVDにまとめ、このDVDを使用した上映会などを企画しておりましたが、これらも中止となりました。その代わりとして、DVDの貸し出し制度を始めております。各種の研修などに活用していただければと思います。

開催された部会においては、事例検討を行ったほか、コロナ対策の中でどのような活動ができるのか、議論を重ねてきました。コロナ対策自体が、様々な活動を行わない方向へむかってしまったため、今後も検討を続けていく必要があります。

権利擁護につながる取組としては、富古市を中心に成年後見センター設置の議論が続いております。当部会でもその動きを注視しているところであり、成年後見センターのあり方や規模、組織体制などについて、意見交換を行いました。今後も、議論を続けていく予定です。

生活支援部会

境田 義人氏

(宮城県立宮古恵風支援学校)

生活支援部会の今年度の取組は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、例年どおりの活動ができない中で、地域の特別支援学校の立場として力を入れてきたのが、農福連携の取組です。



生活支援部会

ここ数年間で県内の農福連携の取組は広がり、宮古圏域においても少しずつ浸透してきています。

生活支援部会でも、障がい有している方々の活躍ぶりが報告される中で、「学校として何ができるのか？」を考えながら、生活支援部会員として歩んできました。

当初、学校の取組は、イーハトーブとりもとの玉ねぎの種まき作業の手伝いでした。それから四年間で熊谷農場の手伝い（ブロッコリー、玉ねぎの収穫）、南澤果樹園の手伝い（リンゴの摘花から収穫まで）と活動を広げ、生徒の経験拡大と障がい者の理解・啓発につながればとの思いで取り組んできました。

本校生徒の活動を継続し、実践を重ねることで、農業分野においても十分活躍できることが分かり、果樹園等と一緒に作業をしたジヨブパートナー・山田の利用者の様子からも活躍が期待できる分野であるとの確信に変わっていききました。

今後この活動は、生活支援部会の中で報告がされ、さらに広がりを見せるものと期待しています。今後本校における取組を継承し、本校の生徒だけではなく、宮古圏域で生活されている方々の理解・啓発と障がい者の活躍できる場の拡大につながるよう努めていききたいと思えます。

精神保健部会

小成 祐介氏

(宮古山病院)

とにかく、新型コロナウイルスの脅威に翻弄された1年でした。救いは、身近な人の感染がないこ



精神保健部会

とです。

精神保健部会も感染症対策により休止を余儀なくされ、市内での感染者が確認されたときには緊張が走りました。

機会があり、新型コロナウイルスについて調べることがあり、地域や医療機関での利用者の状況についても聞き取りをしました。聞き取りによって分かったことは、地域で生活をされている障害をお持ちの方々は感染症対策をきちんとして普段通りの生活を送っているという事でした。入院されている方たちも同様に行動の制限をお願いしているにしても大きな混乱はなく概ね普段通りの療養を続けていました。

今回の感染騒動で支援者は、神経質にならざるを得ませんが、思いのほか障害をお持ちの方々の力強さを知る機会となりました。

この状況は今後も続くことが予想されます。新型コロナウイルスを正しく恐れることでこの難局を乗り越えたいものです。

発達支援部会

吉田敦氏

(岩手県宮古児童相談所)

令和2年度の発達支援部会は、新型コロナウイルスの影響を大きく被りました。第1回の部会自体

の開催ができなかった他、圏域内外の方へのPR機会である学習会、セミナーが笹先生（一般社団法人笹Takamura協会理事）、本田先生（信州大学医学部付属病院子どもこのころ診療部部長）、共に中止になる等、残念なことが多かったです。

ただ、その中で、多くの療育園の川村みや子先生の協力を得て行なっている「そだちの相談会」は、第1回目は開催できませんでしたが、第2回、第3回は実施でき、それぞれ、家族の方、関係者から相談を受けることができました。

又、釜石市でホースセラピーを行なっている「三陸駒舎」の代表である、黍原さんのお話を伺う機会を設ける等、関係する方々との連携を取りながら、今後の宮古圏域の子どもたちの発達支援のよりよい道を考える活動を行なってきました。

新型コロナウイルスはまだ先は見えませんが、一歩ずつでも前に進んでいけたらと願っています。



発達支援部会

宮古圏域障がい者自立支援協議会 専門部会委員長会議

今年度も「宮古圏域障がい者自立支援協議会専門部会委員長会議」を実施しました。この会議は、地域自立支援協議会の停滞感やマンネリ化が課題となる中、自立支援協議会の活性化と各専門部会のつながりの強化を目的に昨年度から開催し、実務担当者会議を含む4つの専門部会委員長に参加いただきました。各専門部会委員長から、今年度の活動計画、専門部会の運営状況、地域の課題についてなど様々な意見交換を行い、その中から、以下のことが提案されています。1つ目は、各部会が実施している活動や地域課題については他の部会でも共有できる仕組みを作ること。2つ目は理解促進のセミナーや地域交流イベントは各専門

部会で協働を模索すること。最後の3つ目は、複雑化する事例が増えるなか、必要に応じて地域内外の人材をオプザーバーとして参加できるような柔軟な体制運営にしていこう。以上の提案がなされ、専門部会運営のヒントをいただきました。専門部会の活発化は、そのまま自立支援協議会全体の活性化にもつながります。次年度の専門部会運営に反映できるように準備していきたいと考えています。

(担当：高屋敷)



専門部会委員長会議





特集 あの人にインタビュー



『ひきこもりと』

対話的支援の可能性』

精神科医 齋藤 環先生



機関紙第31号の特集として、齋藤環(さいとうたまき)先生にインタビューを行いました。齋藤環先生は、ひきこもり研究者の第一人者であり、ひきこもりの現状と支援について多くのヒントをいただきました。また、世界的に注目を集めているオープンダイアログ(フィンランド発祥の対話に力点を置く精神療法)、そして対話についても答えていただきました。紙面の関係上、すべてを掲載することはできませんが、齋藤環先生がお話しした内容を編集しお届けいたします。

Q: ご多忙のなか宮古まできていただきありがとうございます。昨日、宮古市内を回られたそうですね、雰囲気などがでしたか。

齋藤先生: 昨日、浄土ヶ浜をみて、宮古市内もまわってきました。以前、いとこが宮古に住んでいたこともあって、私が小学校のころはよく宮古に来ていました。昔遊んだ海岸が、今は震災後の工事が入れないところもありましたが、とても懐かしく感じました。

ひきこもりの高齢化・長期化

Q: 「社会的ひきこもり」終わらない思春期」が出版されたのが1998年だったと思います。そ

れから、20年以上が経過していますが、当時から現在まで、不登校やひきこもりの方々をめぐる社会環境や変化について齋藤先生はどのように捉えていますか?

齋藤先生: とにかく数が多くなつて高齢化が進んだというのが最大の変化であると言っていると思います。そして長期化している。警鐘をならして治療に取り組んできたが思うような成果が挙げられていないというのが現状だと思います。日本でひきこもりが多いというのは事実なのですが、そのかわりホームレスは少ないといえます。厚労省の統計でも1万人いないという世界的

特集 あの人にインタビュー 齋藤環先生

にみても稀有な社会といえます。ひきこもりもホームレスも現象だけ見ると社会に参加していない人となりませんが、日本では社会参加できない子どもは家族が面倒を見るということになる。ひきこもりやすい環境にあるといえます。これは言ってみれば社会的排除、社会的孤立の問題ですから、精神科で対処しきれぬ問題ではなかったといえるかもしれません。それでも、対応策を求められる方へ応えていかななくてはなりません。この本を書いたのは20年前ですが対応策は今も大きく変わっていません。当時は会話をしましようにと書いてありますが、今は対話をしましように言い換えています。対話さえしていればなんとかなるというところまでラジカルになっ

てきています。また、この本には、家庭内暴力に関しても対応策を書いていきます。農水省の元事務次官の事件が大きく取り上げられましたけれども、以前から子どもの家庭内暴力に苦しんで子殺しという経過を辿ったケースがありました。当時の専門家は、子どもの家庭内暴力は甘んじて受け入れましようという風潮も



令和2年10月25日 宮古圏域での講演会の様子

ありましたが、親も人間ですからね、暴力を受けない権利もあります。その権利を親もしっかりと行使していいのだと主張したかったというのは今も変わっていません。一方、いい点の変化を上げますと、当事者の発言が格段に増えたというのが大きいです。自グループを主宰するような当事者が増えてきました。当事者研究みたいなね。これからも、ひきこ

りも議論は活性化していくだろうという認識はあります。それと制度面では、ひきこもりのガイドラインが作られて、各自治体にひきこもり支援センターが作られて、建前上はどの地域でも、ひきこもり相談ができるようになってきたといえます。私の経験では、ひきこもりの人口は地域差がありませんから、むしろ地方ほど偏見があまりま

すし、病院も少ないという問題もあります。ところが、とにかく各県に1つは相談窓口があるという状況は喜ばしいことだと思っています。また、最近の変化で感じるのは就労支援が充実しつつあると思っています。昔は作業所しかなくて、その内容が、ひきこもりの方に合わないという問題もありましたが、就労移行支援のよう

にトレーニング的な就労支援が制度化されたことは大きな成果であると思っています。

「支援に高度な専門性は必要ない」 Q…先生の著書のなかで印象的なフレーズが多くあります。例えば「たまたま困難のなかにいるまともな人」や「愛は負けても親切は勝つ」「人薬」などです。その方の健康的な部分に目を向けるという大切なことを示唆いただいている気がしますが、昨今、専門的な視点から支援介入するという雰囲気が強く相手との対話を考えたときに、それがノイズになることがあります。この専門性と対話のバランスについて先生のお考えを教えてください。

齋藤先生…行政サービスという枠の中では診断なしというのはありえないと思うんですよ。それは成果をちゃんと評価してエビデンスを残していくという手順が必要になると思います。ところが現場では、粗探しという弊害になりむしろ支援の妨げになる。つまり、書類や手続き上は診断や専門知識があったほうがいいわけですけど、現場で人と向き合うときは人間ですからね相手は、診断とか評価を一旦外してですね、個人と個人で向き合っていたきたい。その際

には、その人のまともさや健康さ、レジリエンスそしてストレスングス、その人の持つネットワークを大切に

する視点が必要です。従

来の疾患モデルですと、この人は病んでいて、この部分が弱いからそれを補ってあげれば治るだろうという発想だった。しかし、これにはどうしても限界があつて、まず、第一に弱みを見つけないければならないですし、診断名をつけるとそれが固定化してしまうということを経験しています。こちらまで悲観的になってしまつたんですね。例えば統合失調症と診断してしまうと、こちらまで治らないだろうという発想になってしまうことがある。そうではなくて、統合失調症かどうかは脇に置いておいて、対話をする、すると改善が起こってくるという現象を何度も経験しています。ひきこもりに関しても、その人のまともさ、たまたま社会参加できなかった人たちという、健康な力や成長力を持っていると信じて向き合っていくという姿勢が非常に大事です。まともさを信じるとは、その人に関する予測を手放すということなんです。つまりプランを立てないということですね。治療現場でもいわゆるPDCAサイクルのような進め方はむしろ弊害になると思つていて、僕らの経験ではっきり言えることは、うまくいっているケースというのは、こちらの予想を超えて変化しているんですよ。予想もしな

い展開を迎えて改善していく。プランなしで場当たり的にやった方がうまくいくという経験をしています。私が勧めたいのは、プランを立てたフリをしていたらいい。支援者は評価したフリをしていただきたい。現場では一切それを外して支援していただきたいと思つています。実のところ、ひきこもり支援において高度な専門性は必要ないと思つています。精神医学の知識はあまり役に立たないと感じていて、長年高度な知識を学んできた人よりも、対話の研修を少し受けて、その方々の多くが対話に参加するほうが良いと思つています。コスト削減につながりません。対話とは人間が本来持っている能力ですから、それほど長期間な研修はいらないと思つています。スキルというよりはセンスといたほうがいいかもしれませんね。200万人ぐらいいると想定している、ひきこもりの方々への支援を考えたときに資源がどうしても乏しいですから、多くの方々が対話に参加できるほうがよいと思つています。

「ポリフォニー」と「ハーモニー」

Q…オープンダイアローグの考え方にポリフォニー（多声性・他者の他者性を認める）がありますか、



このことは、調和を重んじてきたこれまでの支援スタイルに大きな影響を与えると思います。支援者は結論をどうしても求めてしまいがちになりますが、先生はどのようにお考えでしょうか。

齋藤先生・精神科医もそうですし心理や福祉分野の専門職もだと思つたのですが、あるべき姿がまずあつて、改善の方向に寄せいていかな

ければならないと考えてしまいがちです。オープンダイアローグの提唱者たちは、その考えは有害であると云っています。つまり、こちらの枠に当てはめようとしないうことです。そのような支援はだいたい失敗するし、むしろ放棄したほうが予想外の過程を経て良好な落としどころに辿り着く。現場の方が不安になるのは、ダメ出しもしない、アドバイスもしない

と、どんどん本人の勝手な方向に行き取捨がつかなくなるのではという懸念があると思つたのですが、そうはならないですね。それがなぜかはわかりませんが、そこにはコンテクストがちゃんとあるんですよ。対話に参加するだけで当事者には、すでに治療や支援を受けているという意識があるし、ゴールも当事者にもたらされているといえます。つまり、よりよくなるために対話の場面に参加しているという意識が当事者にあるわけです。それ以上のゴール設定を治療者、支援者側で準備する必要はない。ですから、ポリフォニー（多声性）というのはハーモニー（調和）ではありません。いろんな意見を共存させていく、否定も肯

特集 あの人にインタビュー 齋藤環先生

定もない、いろんな意見があつていい。そういった意味では、ゆるい肯定かもしれない。安心してなんでも言えるという関係。つまり対話というのは、違う双方の意見を一致させるのではなくて、なぜ違うのかを掘り下げる。ここから先は理屈ではなくて、深掘していくとなぜか意見の一致が起きてくるという現象が起こる。何度も言っていますが、対話に参加している時点で今よりよくなりたいたいというゴールは共通していますので、無理に調和を求めないということ

がいいだろうと。ハーモニーはその場では美しい帰結にみえるだろうけど、本人はどこか抑え込まれた感じが残る。ハーモニーよりはポリフォニーというのは、ある意味効率よく目標に到達できる可能性があるということはあると思います。

Q：対話というのはあらゆる場面で応用できるということでしょうか？

齋藤先生：統合失調症でも発達障がいでもそうなのですが、自分が発言したことをすべて否定や批判されるという経験をずっとしてきたので、もうしゃべ

らない方が安全だし傷つかないと学んじやうんですよ。結果的に必要最低限のことしかしゃべらない。それをみて私たちは自発性が乏しいとか主体性が失われているのだとか決めてしまおうわけです。例えば、発達障がいの人に発達障がいがいらないような対話は避けていたきたい。つまり、発達障がいを強化するようなコミュニケーションですね。日本では学校などの場面で空気が読めないなどの状況になると「アスぺっぽい」とかですね、レッテルを貼られるとかラベリング効果で、その方向へ寄っていくこともあるわけです。そういうレッテル貼りをしないで、まともさを信じて対応していく。発達障がいということにとらわれずに対話をしていくことで、その人がもっている能力にも気づかされます。私の場合、オープンダイアログの対話をひきこもり支援に使えると思っていて、かなり有益な作用があると思っています。

ひきこもりの場合、家族との問題が多く割合を占める場合があるので、家族を交えて対話するだけで随分と状況が変わるんですよ。最近ではNOOYを使って対話をするということもありますが、対話は治療法という発想よりも、ケアの方法なんですよね。ケアというのは誰

に対してもできる。対話的なケアというのは普遍性があります。基本的にケアの精神があれば多くのことに対応できるのではないかといいことです。実は精神疾患はケアだけでいいのではないかと最近思いはじめています。

チームでの対応が重要になる

Q：ケアの重要性ということですが、障がい福祉の分野において、1人で相談支援を実施している事業所も少なくありません。ケースに向き合うにあたり1人では、不安や戸惑いを抱える相談支援専門員の声を聞くこともあります。そこで、アドバイスなどあればお聞きしたいのですが。

齋藤先生：訪問看護についても言えることなのですが、1人で対応することは1対1の関係になりやすい。それはどうということかといえ、1対1の関係は密室化しやすい。しかも上下関係なんです。支援を受ける側が下ということになりやすい。ケースによっては、支援者に対して恋愛感情を抱くことや嫌悪感をむき出しにされるこ

ともある。支援をする上で好ましい状況ではなくなる。チームで対応、つまり複数で関わるといことが重要になります。相手側も複数がいいですね。訪問時は家族も同席してもらうなど工夫ができればいいということです。先ほど言いましたように、1対1では密室化しやすく、誤解が起こるリスクがあります。1対1がいくら対等性も担保できない。複数対複数の方が対等性を担保しやすいです、そこに安心感も生まれます。相談支援をする上で是非、チームで関われるような体制があればいいと思います。1人ではなく、複数で関われる工夫を是非していただきたいと思っています。

Q：齋藤先生、今日はご多忙の中、時間をいただきありがとうございます。

齋藤先生：ありがとうございます。障がい福祉分野の支援は、ひきこもり支援の重要なリソースであると思いますので、これからも継続的な支援をしていただきたいと思います。

齋藤 環 (さいとうたまき)

岩手県出身。精神科医。筑波大学医学研究科博士課程修了。爽風会佐々木病院等を経て、筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。専門は思春期・青年期の精神病理。「ひきこもり」の治療・支援ならびに啓蒙活動についての著書多数。

Report! 「福祉の現場から」

Report

「精神障がいにも対応した 地域包括ケア協議の場について」

平成29年、「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」の中で、「入院治療中心」から「地域生活中心」という理念に基づく施策を推進し、精神障がい者の地域移行を地域において具体的に進めていくために、「精神障がいにも対



応した地域包括ケアシステム」が明記された。精神障がい者が地域の一員として安心して自分らしい生活を送れるよう、保健、医療、福祉関係者が協働の場を通じて地域の課題を共有し、取り組みを推進することを目的に、「協議の場」の設置が必須となったことを受け、9月の宮古圏域精神障害者地域生活支援広域調整会議等事業（地域委員会）において、新たに宮古市地域包括支援センター、各市町村の福祉担当者を委員に加えて協議を行った。

第一回目は、宮古圏域における「精神障がいにも対応した地域包括ケアシステム」を推進していくにあたり、事業内容（普及啓発等14項目）、構成要素（住まいや社会参加等6項目）、ポイント（早期発見と支援等5項目）について説明を行い、その後、事例検討を通して意見交換等を行った。

今後は、県内でモデル事業をしている地域から取り組み状況を聞き、次年度に向け、さらなる地域移行を推進できるように方向性や目標設定を検討できればと考



えている。また、精神障がい者の方が安心して地域での生活が送れるよう、今後も地域に根差した支援の提供に努めていきたいと思っている。

（宮古圏域障がい者福祉推進ネット 澤田）

こんにちは、「地域活動支援センターみやこ」です!



「地域活動支援センターみやこ」では、障がい者等(身体障がい者、知的障がい者、精神障がい者、障がい児及び難病等)を対象に、自立の促進、生活の改善、身体機能の維持向上、社会との交流の促進を目的に、創作的な活動、SST(社会生活技能訓練)・ピアカウンセリング等の活動、各種サークル活動を行っています。また、専門の職員を配置し、医療・福祉および地域の社会基盤との連携強化のための調整、ボランティアの育成、障がいに対する理解促進を図るための普及啓発事業を実施しています。

インタビュー内容

- ①参加して楽しかった活動、印象に残っている活動
- ②また取り組みたい活動
- ③今後取り組んでほしい活動
- ④その他なんでも

Iさんに聞きました

- ①SST、ピアカウンセリング、帆立の会、趣味サークル、表現活動
- ②物作りをしたい
- ③彫刻、陶芸、版画、切り絵
- ④地活に来ると自分一人では出来ないことも出来る。人との触れ合い、様々な年代が集い、色々な話が聞ける。自分の考えの幅も広がり、自分確認も出来る。自分にとっては貴重な場所、欠かせない場所。

Kさんに聞きました

- ①表現活動の靴下で作った雪だるま、散歩(初めて三鉄に乗りました)
- ②パステルアート、絵手紙、散歩
- ③遠くじゃなくていいからお出かけ、料理もやっぱりいい。
- ④ヨガもやりたかったが感染症で中止となり残念。自宅にいるより地活に来たほうがいい、気分転換できる。みんなとあ〜どこ〜ど言ってる楽しいし、これからも続けて参加したい。

今年も新型コロナウイルス感染症の影響により大きなイベントは中止、通常の活動でも制限を設け、感染症対策を講じながら実施してきました。そこで、そんな中でも参加していただいた皆さんに、今年の活動を振り返ってもらい、活動への意見や感想をインタビューしてみました。

「地活みやこ」今年の振り返り



散歩で見たイチョウの木 (趣味サークル)



靴下で作った雪だるま (表現活動)



三鉄で田老へ! (チューリップの会)



地活を利用してくださる皆様のご意見を参考に、今後も居場所の一つとして、また様々な活動を提供し楽しんでいただけるよう、スタッフ一同取り組んでまいります。

Mさんに聞きました

- ①今年花金だるまのみに参加した。いろいろな話が聞けて楽しい。
- ②調理教室にはまた参加したい。
- ③地活の利用を始めて1、2年、まだまだ参加したことがない活動がた〜くさんあるが、物作りは細かくて難しいかな?手伝ってもらえれば出来るかも?
- ④仕事の都合でなかなか参加できないが、これからも継続して参加したい。いろんな人と知り合って仲間になりたい。これからもよろしくお願いします。



なんでも KEIJIBAN

「権利擁護セミナー」
寸劇DVD貸出しします！

- 2017年と2018年に実施した権利擁護セミナーでは、制度や支援基盤に関する周知を目的に寸劇を行ないました。分かりやすい内容となっているので、是非ご利用ください。
- 貸出期間…1週間以内
- 貸出費用…無料
- 申込方法…電話かFAX
- 視聴後はアンケートへのご協力を願います。



家族のための精神保健セミナー

in宮古

- 日時…3月4日(木) 13時～15時30分
- 会場…宮古地区合同庁舎 大会議室
- 内容…
- ①管内情勢報告

②講話

「家族が元気になる」コミュニケーションとは」
講師

岩手大学人文社会科学科人間文化課程

教授 奥野 雅子 氏

- ③家族による懇談
- 対象者…宮古地域にお住いのご家族、家族支援者等
- 参加費…無料

● 問い合わせ先 レインボーネット事務局

TEL 0193-64-7878
FAX 0193-77-3921

令和2年度会費のご協力ありがとうございました!

- 会員数の状況 (令和2年11月30日現在)
個人会員 82名 (正会員 61名・賛助会員 21名)
団体会員 34団体 (正会員 28団体・賛助会員 6団体)
- 団体会員のご紹介 (令和2年11月30日現在・順不同)

団体名		
正会員	ジョブ・パートナー山田	県北緑化 株式会社
	わかたけ学園保護者会	宮古恵風支援学校
	宮古アビリティセンター	自立生活支援センター・ウイリー
	みやこワークステーション	あっとほうむ life みやこ
	望みの園はまなす	医療法人財団正清会 三陸病院
	フリースクール花鶏学園	岩手県沿岸知的障害児施設組合
	SELPわかたけ	はまゆり学園
	ワークプラザみやこ	はあとふるセンターみやこ
	宮古市身体障害者福祉会	NPO 法人 ハックの家
	アトリエSun	わかたけ学園
	みやこ手をつなぐ育成会	岩泉町社会福祉協議会いずみの里
	岩手県社会福祉事業団 松山荘	宮古市社会福祉協議会
	山田町手をつなぐ親の会	新里紫桐会 工房まんさく
	いわて高次脳機能障害友の会	社団医療法人親和会 宮古山口病院
イーハトーヴ沿岸地区	宮古市末広町商店街振興組合	
賛助会員	あおば工房	岩泉町身体障害者福祉協会
	みやこボランティア連絡協議会	そけい整骨院
	職業訓練法人 宮古職業訓練協会	株式会社 川井産業振興公社

かい いん ぼ しゅう 会員募集

NPO法人
レインボーネットの
活動を応援して下さる方を
募集しています。

個人

正会員 1,000円
賛助会員 500円

団体

正会員 5,000円
賛助会員 1,000円

編集後記

掲載写真の多くの方がマスク姿です。今ではすっかり当たり前の光景になりました。年度初めに計画した企画も中止せざるを得ない状況が続く、毎年、皆さんにお伝えしているイベントを掲載することができませんでした。残念ですが仕方ありません。早い終息を祈るだけです。【高屋敷】

2020年語・流行語大賞は「3密」でした。私が「3密」で真っ先に思い浮かぶ場所はライブハウスですね。最後に行ったのは2019年の12月、まさに「3密」だったなあ…。コロナに翻弄された2020年でありましたが、気持ちも新たに、またあの「3密」に戻れる日が来るのを楽しみに2021年スタートです! 【大内】

昨年は「鬼滅の刃」が大流行しましたね。一昨年末にハマってから、漫画も購入し枕やトースター等のグッズまで購入してしまいました。最近では、「アニメ2期やったら何話までやると思う?映画第2弾はどの話だと思ます?」なんて夫と予想しています(笑)。今年こそはコロナに左右されずのびのびと過ごせますように! 【上田】

会員募集中です! よろしくお願ひいたします。

◆発行
NPO法人宮古圏域障がい者福祉推進ネット(レインボーネット)
岩手県宮古市緑ヶ丘2番5号
はあとふるセンターみやこ1F
TEL 0193-64-7878
FAX 0193-77-3921
E-mail info@mjako-rainbow.com
URL http://www.mjako-rainbow.com/
◆発行責任者 会長 刈屋裕之
◆企画・編集
レインボーネット事務局